

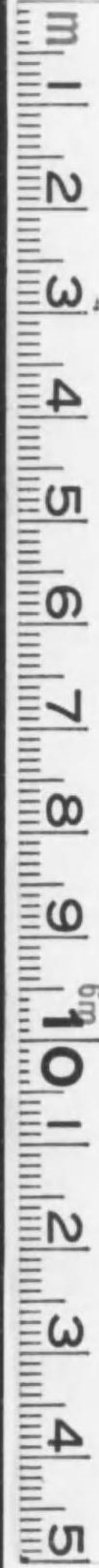
農家調寶記二編全

特 279

特279-264



第千百八十四號



始



龍背師傅圖說

人田錦城先生直傳  
門人荒井堯民老人著

金三册

此書ハ世ニ稀ナル家相ノ祕書ニテ家造ノ形相地面ノ張欠等ノ  
画圖ニ顯シ圖アトニ口傳ヲ述テ住人盛衰ハ元ヨリ妻子眷屬ノ幸  
不幸親子ノ間ニ故障アル一輪ナル子孫出生スル事ト人等  
ニ不忠ナル者是アル一宗ルヲ紐所持ナス一又ハ火難水  
難病難色難盜難等ニ至ルニテ悉ク眼前ニ知得ルノ妙訣ナリ  
錦城先生家相師傅ト號シ著所ノ書既ニ先年龍背遺祕ニ表  
著ス次デ師傅圖說此度成ル退ニ雕刻シテ世間ノ寶トセニ一フ  
希願ス

横山町三丁目 和泉屋金右衛門梓

農家調寶

紅二編目錄



- 三族九族と云事
- 親類の事
- 経父嫡母の事
- 八宗十宗 諸宗門の傳來
- 夜半の界と云事

- 伯叔の字と母方差別の事
- 遠類の事 系編者
- 氏神と土神の事
- 日の吉凶と探むる得の事
- 果日時計兼おしと園記と云

- 去地田畑の諸る農家の用字
- 諸流又一札の素文
- 町場店書状
- 同地文状

- 家賃詫又家守詫状の巻一札
- 家賃送在巻一札
- 離縁状
- 口論扱の巻詫詫又武通
- 撰詫又
- 日用相場早刻品々
- 金まゐの清て銀まゐと和
- 卦米の清て銀まゐと和
- 米の相場扱
- 友物の天附
- 友物刻武巻
- 米小賣の巻相場刻品々
- 米漬の相場扱武巻
- 米相場銀刻水刻の心傳
- 利是早巻并月何刻本何刻の子算品々
- 東田舎同刻
- 金浪重さ為合巻并同品々

農家調寶記二篇

東武 高井伴寛翁 編

三族九族と云事

凡そ夫婦二人倫の縁家道の根をき、匹夫下族の才と云  
 どもも元と云くせざれば子孫繁榮するに夫婦あり  
 親子あり子有て孫と生も是と云親と云父の兄弟已が兄弟  
 我子は兄弟の男女は三族と云親の志は三族は三族也  
 己が父祖父曾祖父も祖父まで三族の名有て高祖父の父は

續の名を分く。夫も前、何代も先祖と稱せしむ。子孫  
ひと、孫と稱す。續の名も、玄孫の子、續の名も、如く血脈  
かまは、後胤と稱す。或、何代の孫と云是、備已よりよふ。曰ッ  
下ふ曰ッの肉親、又兄弟の男女、子孫の男女有、已と俱、九ツ  
か、由、物、七、九族といふ。之、族、互、不、親、九族、は、血、流、を  
是、く、く、く、く、く、の、老、若、く、已、り、何、代、も、の、先、祖、父、母、乃  
血脈の外、か、く、九族、は、續の名、を、分、く、也、何、人、也、何、人、  
父母の兄弟、伯父、叔父、を、子、に、從、也、其、子、に、從、也、違、を、子、に、又

從、也、を、子、に、續の名、を、分、く、也、是、より、父の、何、人、之、又、從、也、と、云、  
九族の内、之、祖、父母の、兄弟、は、大、伯、父、大、叔、父、を、子、に、從、也、  
其、子、に、又、從、也、を、子、に、何、人、之、兄弟の子、男、甥、女、姪、を、父、  
男、に、又、甥、女、又、姪、を、子、に、何、人、之、又、甥、女、姪、を、父、  
の、伯、叔、父、母の、父母、は、大、伯、父、大、叔、母、を、母、に、從、也、  
伯叔の文字、父、方、母、方、の、差、別、か、く、也、  
伯叔の文字、兄弟の、唯、と、云、り、之、元、來、兄弟、何、人、か、く、伯、叔、  
叔、母、の、曰、ッ、也、何、人、也、伯、叔、父、叔、父、弟、父、を、お、お、也、何、人、也、伯、母、

是例今日日本に准伯叙の二字は別と由るに己が父の兄かふ  
 裁人をも伯父己が父の弟に皆叙父己が父の姉に伯母姪を  
 叙母とて母の兄に姉姪も是に因く伯と叙に母の兄の弟の  
 姉の姪に別の名に姪もよ士の家に入ると連へ父方伯の  
 字母方伯叙の字と別すと覚し族も遠く遠く遠くは  
 心得遠くももまゝに母方でも母の兄かふ母方の伯  
 父姉かふ母方の伯母父の弟に父方の叙父姉に父方の叙母  
 と叙母己が父の伯叙父母と大伯父大叙父大伯母大叙母と

孫をも伯叙の順にあふ云と諸従身の續とて明白に  
 ども従身の子と又従身と是なるを方より認む従身従身

遠又従身も次の續切て他人と覚す  
女は、従身女、従身遠女  
又従身女と稱さるべし

○親類の事

祖父母父母妻慈順姫次男之男娘孫孫女兄弟姉姪伯父  
 叙父伯母叙母甥姪従身従身女是と親類と云はは通を言  
 續と云ふ由る由り伯父は是に似ても實は別に出づ女子  
 は名へ出生しては男子の次ふ是より男子なく女子へ婚と

是たり。惣領の如く舞臺子。是は亦娶合する女子は也。  
是は家督の由へ。次男之男より上ふ。是は先づ他家あり。  
又己が家小を。惣領小立ぬ。厄介由へ。亦亦出孫。種りれども。  
家不附るもの由へ。先より上ふ。出たて。義理は具。此世。  
之の。け。親類。互に。忌後。と。受て。親類。の。是。  
家不附るもの由へ。  
縁者。の。由へ。  
○遠類。縁者。の。事。  
大伯父。大叔父。大伯母。大叔母。又甥。又姪。従弟。遠従弟。遠姪。又従弟。  
又従弟。女。是と。を。類と。云。九族。の内。か。き。とも。ま。い。忌。後。と。云。此。縁。者。  
と。い。男。姑。と。姑。己。が。妻。の。兄。弟。小。男。甥。妹。小。姑。己。が。娘。嫁。姉。たる。  
先。の。婿。己。が。次。男。之。男。と。他。家。の。表。子。に。を。世。し。先。の。姑。か。之。を。類。  
は。續。互。縁。者。に。續。か。し。御。とも。却。て。を。類。より。親。は。之。の。け。外。  
姻。姪。又。男。姑。の。兄。弟。姉。妹。妻。の。伯。叔。父。母。等。は。縁。者。不。  
あ。り。伯。父。叔。父。母。等。甥。姪。姑。等。又。同。一。皆。同。柄。と。云。ま。て。是。  
他。人。之。母。に。忌。後。以。て。受。て。親。を。ま。す。も。縁。母。の。父。母。姑。姪。親。類。の。  
皆。他。人。之。是。も。縁。母。小。養。子。と。る。は。表。母。由。へ。も。親。類。は。皆。母。方。の。

是たり。惣領の如く舞臺子。是は亦娶合する女子は也。  
是は家督の由へ。次男之男より上ふ。是は先づ他家あり。  
又己が家小を。惣領小立ぬ。厄介由へ。亦亦出孫。種りれども。  
家不附るもの由へ。先より上ふ。出たて。義理は具。此世。  
之の。け。親類。互に。忌後。と。受て。親類。の。是。  
家不附るもの由へ。  
縁者。の。由へ。  
○遠類。縁者。の。事。  
大伯父。大叔父。大伯母。大叔母。又甥。又姪。従弟。遠従弟。遠姪。又従弟。  
又従弟。女。是と。を。類と。云。九族。の内。か。き。とも。ま。い。忌。後。と。云。此。縁。者。  
と。い。男。姑。と。姑。己。が。妻。の。兄。弟。小。男。甥。妹。小。姑。己。が。娘。嫁。姉。たる。  
先。の。婿。己。が。次。男。之。男。と。他。家。の。表。子。に。を。世。し。先。の。姑。か。之。を。類。  
は。續。互。縁。者。に。續。か。し。御。とも。却。て。を。類。より。親。は。之。の。け。外。  
姻。姪。又。男。姑。の。兄。弟。姉。妹。妻。の。伯。叔。父。母。等。は。縁。者。不。  
あ。り。伯。父。叔。父。母。等。甥。姪。姑。等。又。同。一。皆。同。柄。と。云。ま。て。是。  
他。人。之。母。に。忌。後。以。て。受。て。親。を。ま。す。も。縁。母。の。父。母。姑。姪。親。類。の。  
皆。他。人。之。是。も。縁。母。小。養。子。と。る。は。表。母。由。へ。も。親。類。は。皆。母。方。の。

親類の正衣の通親類とを称し縁者とは名別ありと云。  
農高の家子、悉く其遠妻の里方以親類と覚婚の家元。  
女の縁付たる先の親も親類と稱す夫から誤り血脈をたづ  
親類遠に遠は血脈なく婚はより親む縁者なり也  
長父母継父母聲孝子慈順の娘をた血脈なく親類  
から格別の名を親類と名はばは更なる種ありとも元  
改正の後忘令と云ふものは是と見そ知じを意有て是を速と

○継父嫡母の事

継父は己が父没せし迹を後意に入ませしう己が母再婚の  
先へ連しうこの内にて血脈をた父なる妻の人おなれと云  
るれども源義経を母常盤平清盛はふ具したる丸合は  
継父清盛と書り農家がどのをた入妻の継父は継母の  
とくを親類他人母の連て縁付し先の継父は妻の  
を継母表方の親類と名はばは嫡母は身父の妻後  
の子から時父の本妻と云へ嫡母と稱す農家はは名目  
よく知ぬと知り嫡母の表育は更なる表母と云へたも

たゞく自家もせしむるまでも嫡母もて血脈はかくも掛り  
け親類は嫡母の親類と他人かごとく嫡母も同く儲け氏  
の風俗と見ふ九族と親睦の道別く農家厚く寛く賢  
賢の者に命をまべしは親九族と親と結ぶへくは村中  
の附合年長と先づて敬ひこゝと謙高を誇り之とも命を  
くくは心せばもき自ら天道神明の慈あり人をも兄弟  
等く父母と慕て養育はあり漸成長して妻と迎ふはと  
姪とひきの命がぬるるうひを是も人屠とのしむと出来こが

妻の愛お満きしつら密にお親と味老親隠居し己うが解  
と申ふ及て唯妻子のそむの者と思ひ親が邪なりはと  
なり隠居お徒然とて朝夕の同音ほく掃くふかり親も  
亦一時も子く世話まんとは慕ふ又兄弟は是のこくをて  
育立命し各款心出来しは不自然とて財為く他人へ去り  
者の妻とらきふ多味くは物と評ひ内ん仇敵のこく  
孝悌忠義の道まお放て終ぬ能合家業小成りも父母は  
養育幼勞せし思く遠く乳味と命所と扱せるるは



思ひ人の性も果るもの。父母と兼路するも人々兄弟姉妹  
幼少て育めは父母の膝下も遊合はあつたまふは成  
ま。けむと道き。孝情無量の道きより以て父。道法  
ゆく教唱も妻も婦道と令ふまふ。御業の文も是より伝  
かまへ

○女神と土神の事

女神と土神は、源姓は六孫王権現。平姓は高皇產靈の皇女。東姓は諸心  
権現及び春日は梅姫。梅文は祖廟にけし類。その姓の源姓

久く女神と云居村を如の法守にまき。土地の神も人生  
土神と云け武。信勢女に續てむも伝ま。日本おまき  
者も貴も財も皆神の御裔をまき。怪は身も父。父祖の  
系譜りか。子孫へ云傳もまは先祖。何姓も何人かや  
あぞ。氏の神も知れた。可の法も女神もまき。女神も  
とまむむとまきとも。農家。先祖の系譜は女神。血脈  
由緒分明なる古家多。叔村は法守と作され如の法  
神。古来の法座中興の勅法。神の中は神號も耳訓

ぬあり。性たも延表武休名帳多ふ出さるゝる心の社はも。  
 浪洞とて常用のりのと定らさるゝた久バ一村住吉の社を  
 清水とせんお色ハ振別住吉江横らるゝて振名の記知ハ  
 天照太社 一社 宇佐八幡 一社 唐蘭男令表蘭男令中  
 蘭男令 一社 神功皇后 一社 合つて四所明神と称する如かりと  
 辨か。佐作も延表をさるゝ思ふおぞ名あり。神は記る  
 如し。おれ。おれ。おれ。

嚴邊太社 一社 伊勢内又又作社 一社 伊吹明神 一社 任夜太社 一社  
久遠の社 又云天照太社

信小ふいと和 和名 率川社 和名 出生堂社 和名 任夜太社 和名 任夜太社 和名  
 天香之心命 和名 出生堂社 和名 任夜太社 和名 任夜太社 和名  
 岩本社 和名 生田社 和名 嚴島社 和名  
 藤原市持島命 和名 出生堂社 和名 任夜太社 和名 任夜太社 和名  
 田心姫御津姫 出生堂社 和名 任夜太社 和名 任夜太社 和名  
 八幡宮 和名 任夜太社 和名 任夜太社 和名 任夜太社 和名  
 月社 和名 走湯社 和名 箱根権現 和名 箱根権現 和名  
 箱根社 和名 柁本社 和名 柁本社 和名 柁本社 和名 柁本社 和名  
 土師文 和名 榛名権現 和名 榛名権現 和名 榛名権現 和名 榛名権現 和名  
 柁本社 和名 柁本社 和名 柁本社 和名 柁本社 和名 柁本社 和名

徳神社  
丹生社  
新田の社  
豊受社  
...

豊浦社  
戸隠神社  
行基神社  
...

小笠原神社  
尾上社  
生原社  
...

大東社  
大社  
...

春日社  
藤取社  
...

香春社  
信子社  
...

善城社  
豊田社  
...

吉田社  
大智月社  
...

建礼社  
多賀社  
...

高師社  
玉清神社  
...

道隆社  
帝釈社  
...

月讀社  
筑波神社  
...

津村社  
子聖社  
...

南本社  
長田社  
...

...

...

...



赤城社 あかぎの 秋系権現 あきまきごんげん 愛宕権現 あぐごんげん

聖徳太子の師 あすか 足羽社 あすかの 穴織文 あなをりの 二枝社 ふたえだ

神社と云 かみ 之室荒社 このむら 山王権現 やまおうごんげん

櫻井文 さくらい 花之権現 はなのごんげん 座磨社 ざまがら 延 のび

養社 やう 貴月社 たかづき 鬼子母社 おにのぼろ 吉住権現 きちずごんげん

長祥天女 ちやうてんぬ 観月社 くわんげつ 湯泉権現 ゆせんごんげん 小義権 こぎごん

現 ま 之浦社 のうら 之輪社 のりん 之棟社 のむね

水尾社 みづお 南方刀 みなみかたな 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

白葉社 しろは 白葉社 しろは 白葉社 しろは

神宮天の 執金剛神 天の御子 金剛王 青龍金剛  
神又廣中 日新神 天孫御孫 日新神 比叡回祇神 比叡  
神又廣中 日新神 天孫御孫 日新神 比叡回祇神 比叡  
香山権現 天孫御孫 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
十住師孫 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
天神二世 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
牧皇社 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
氷川社 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
石宮権現 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
神宮と云はる日新の御 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
金と云はる日新の御 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡

例儀社 女房の一の儀 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
又水向 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
男根社 比叡回祇神 廣瀬社 比叡回祇神 比叡  
玉明神と云ふ人の見ざる処と云ふ以明と云人のあきく処は加  
と神と云はし。淮南子も出権現と云世も。令則の神。推不  
化身と現と云最勝王經も出せり

○八字十字諸宗門の傳來  
農家各の宗門以て。檀那寺は蘇曉寺と云ふ以て。出祖

代々の支辨と世代と稱す。も餘代、早世の具やある  
まで。追後の管忘べうに。他人表子や嫁小きう。くも  
先の家少く供養まへさ処ありけ方。志あり。海法事  
にまじ。知者懇志の戒名以持佛小張並る。こに。鬼  
小阿く。世して奈と云て。愚昧のこ。況や。海法界と云。見  
も知を。其れ具は。其れ笑へ。さ。先祖と子孫。血脈  
あり。由。位以。疑。し。紀。感。應。も。有。理。之。傳。家。り。三。界  
系。具。以。依。表。する。新。氏。の。法。之。を。家。か。知。り。知。る。海。宗。の

若。惡。以。論。する。ハ。世。益。之。惡。に。宗。門。か。り。公。少。て。立。世。と  
謂。なり。安。去。の。宗。論。以。奉。も。朝。廷。少。て。名。傳。宗。傳。は。是。り  
ま。記。録。ふ。も。世。道。も。其。實。ハ。新。地。如。來。再。生。し。て。割  
小。あ。く。せ。い。其。の。務。者。ハ。定。べ。う。に。以。て。あ。く。も。ま。く。の。宗。門。之  
玉。の。傳。承。祖。と。作。ぐ。処。と。あ。く。に。徒。名。自。己。の。宗。持。以。表。へ  
ま。為。く。△。律。宗。持。律。宗。秋。高。の。第。四。祖。優。婆。鞠。多。高。者。の  
廿。子。墨。子。傳。け。家。と。立。唐。去。少。て。南。心。の。道。宣。和。尚。日。本  
ハ。人。皇。甲。子。乙。未。孝。謙。帝。の。天。平。徭。室。乙。未。年。唐。の。招。提。寺。の

經高和尚後來てけ宗門と云ふ戒律の法 △三論宗釈尊

より第十祖法樹菩薩小出坊摩羅什と祖と云ふ唐土

建無方の吉苑和尚日本、二十二代推古天皇二十二年。

高僧法惠灌頂心元無方ふまてけ宗門と云ふ本坊の始

祖と云ふ△天台宗法苑宗 是も法樹菩薩宗門と建無方

小齊の惠文日本、八中代桓武帝の延暦年中最澄入

唐して宗門と傳り。法好の後比叡山法園に始祖と云ふ

△法云宗法苑宗又之 是も龍樹大士小出。南天竺の法智

菩薩と祖と云ふ。不空金剛若畏之苑等。唐土小後唐土

一行の圓梨日本、桓武帝の延暦年中空海入唐して宗門

と傳來し。金剛華と法園に始祖と云ふ。△華嚴宗。是も法

樹より出。唐土、終南山の帝心法師日本、興福寺の慈円僧

都と祖と云ふ△唯識宗法相宗 釈尊より第十祖世親菩薩小

出。戒賢律師法祖と云ふ。唐の玄奘三蔵日本、二十代舒明

帝の初め法宗渡り。南都興福寺の道昭和尚と始祖と云ふ。

凡日本に宗旨の渡り。是も法と云ふ△俱舍宗。起五



唯藏宗少同。但唐去少て道空律師と祖と。日本  
六之論宗の諸師主明等兼傳。一八藏実宗釈書  
より十九祖鳩摩羅多者の中子波摩之苑と祖と  
了。唐去少く揚立者の若亡畏之苑日本五ノ十代元明  
帝の和同二年。け宗門波り。之論宗の諸師兼学すも  
由一宗別ふ立也。以上と八宗と云。 は也今録るる事多  
く大なる事多し  
△唐去宗釈書の後世親善護より出善提流又之  
苑と祖と。唐去少、曇鸞道綽善導大師曰く六

法法と人と祖と。八十四代順徳帝の建暦二年入寂  
す。追々福号と賜ひ。是れ文化年中六百年忌すべく  
圓光東漸惠成ノ覺大師と稱せ△禪宗 以ん宗 釋書よ  
廿八祖達磨尊者と祖と。唐去少て二祖惠可大師より。  
六祖惠能大師を傳へ。是れ諸師とす。日本少、之廿六代  
舒明帝の舒永後り。六十二代醍醐帝の舒永も流り。が  
仍も舒りに。八十二代後鳥羽院の舒永。唐去の道隆和尙  
日本の道元律師入唐して在り。と傳へ來て了九。教あり

玉永平も試問く。東家と云はた隆ハ新約江の命を鎌  
倉小連長も試問た。西家ハ此も是も大よむ曹洞  
臨湫の諸派を。八家小禅浄土加十宗と云へ一向宗  
法持と人の身子親響も今して。在家法生の一派と云  
しあらはしより。親響と人一宗の組とて。高貴世に  
来よふ法と云。同郷の正統ハ親響の女覚任尼より。  
如任と人と相兼し。如任と人の子息より。本頼も二家  
小別を。慈願教如と人と東の組と。次男准如と人今宗

本頼も試問て。和と和と。又ア牙田無字も仁光の法派  
出たり。△時宗 遊の派 一遍上人起立の一派。法持道  
場と没諸呂と遊のしとれと云。是中子化阿は院以  
續でけ家試問人。一遍慈覺本文の宝殿も通教と云。  
日向の偈と感得せしふ。六字名号一遍法十界修心一  
遍終。新約離念一遍證。人中とて妙好華と云。日向  
の上の字と云。是も六十万人の。是も六十万万人決定法生  
と書るれと云。遊の動化と云。△日蓮宗

日蓮聖人日本にて起すの一事。八十二代後深草院  
建長六年始て七字の題目代唱へ千年来若くは終て  
宗の終ふ流布せり。六老僧中老十八人の言中曰明師  
の弟子九老の諸師ふて進く諸派と別る後又久  
遠成院日親大不宗つと聲ありて。根難宗能小等  
一世小冠端と移り。又末妙通寺の開山日什聖人も  
一派の祖也。什門と云△其禪宗。禪宗の一派あり。  
大明の二十を由櫛の永曆八年。本朝に後光明帝の

兼應二年。徳元禪師日本不來。越前守治小善徳心  
と宗あり。日本少て言中とかりし。本居等續て唱へ起。  
以上八宗十宗の内不非を於て宗外と移り

○日の吉凶と權む心傳の事

農家日の善悪は唱へたり。天天日地大日少後波為ぞ  
二隣亡ふ繩結成せざるごとし。人の忌と成りけ除がじ。  
蓋々長曆の頼日九善悪の事久し。統小日大干  
支配合の六つより出。いか一定のちりて。毎年始り



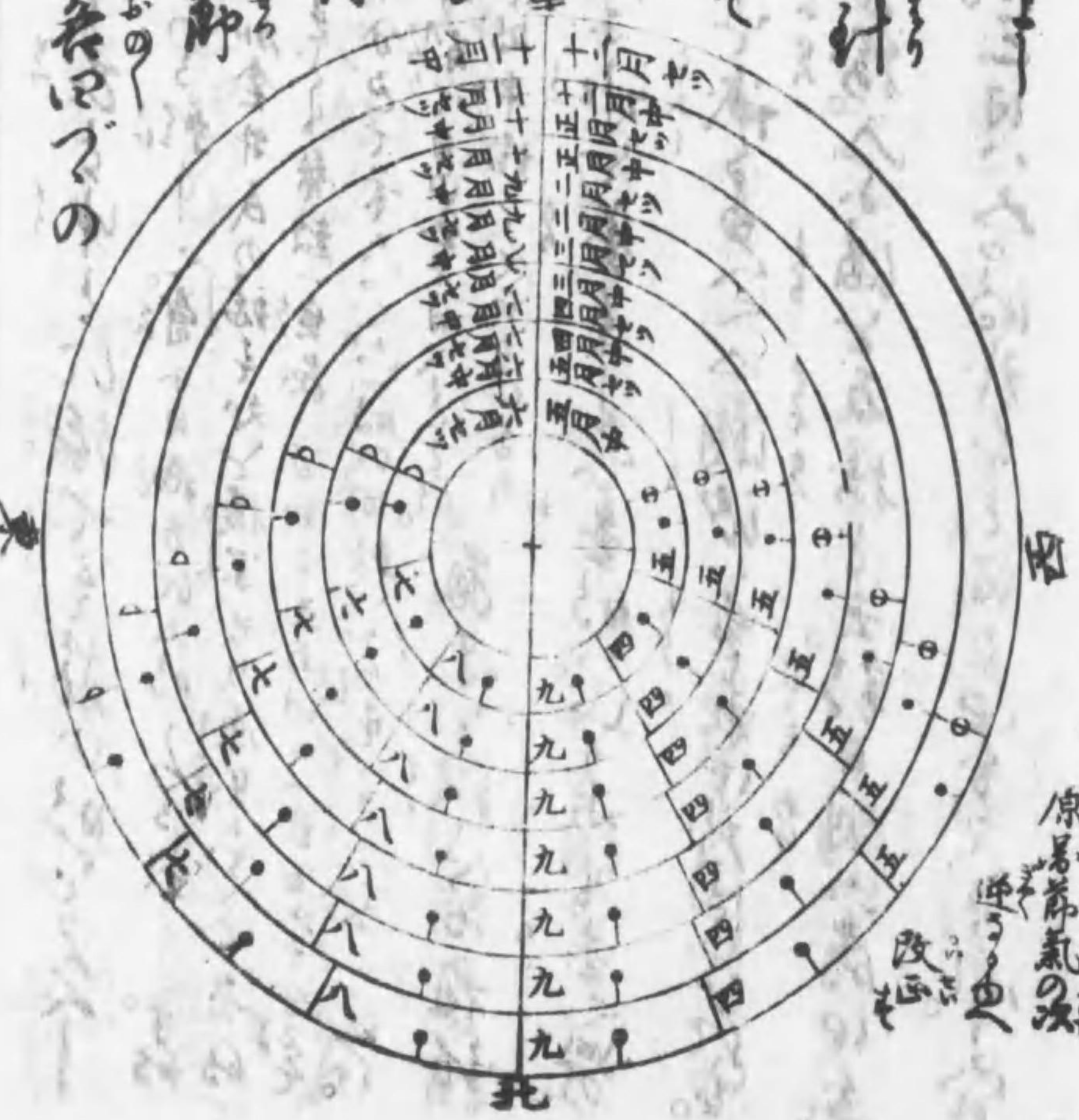
情のく。食も天變とて懼る。其の定る教を食  
はるも。毎月朔日小の日月道と同く。日ハ言く月ハ小  
是。通南山の夜と一ふまる時食とからぬ。小日食ハ細白  
小限ノ下から月よから日と隔地より、欠てぬれも。  
實小日ハ小限ノ十日ハ六日の間ハ満月を。日ハ地ノ下入  
きとも。地の影と射とけ。影天不つるごとく。毎日  
かれとも。影のく。月ハ地影の闇虛小  
入時食とる。十日ハ六日は月の時小限ノ月ハ日の光と  
交と光るとのから。小地の影の闇小入。日の光と交とる  
から。交とけ。闇とる。影小入。影ハ影。實ハ月とを  
限とて。地より見えぬとて。影ハ天とせられ。雲海  
一。影。日月の陰ハ皆既と云。このつら。刻で十分の  
食ふ云とて。曆教と推時ハ十年先の食も測から。影  
理有るの故。日ハ昔日とも。影日とも。定ぐる。影と  
あまとも。毎小交ると有日。除るも。可く。入曆  
法採入。中限のめ。同ぬをあり。毎日の入。影と化あぬ。

歴々、本姓の人ふ申候のみけが火う氷をら、吉念金う  
去り、凶く第一論をさるの生魁と掲て回る  
ハ、誤まり、重日復日、うさるふ、ひの初由、婚烟  
葬送かとい、忘とも外の吉事ふ、却て吉日之、曆以  
て目、以探、を活用と知し、みけ生魁の妻由、愚が  
著処の、河、活書、示蒙鈔、近々、發版をじ  
夜半、以、以て、昨今の界、と、ま、事  
曆、百刻と十二時、八刻、二十二分

二十三分、一時の鐘を、鐘時計を、六、百、十二時、百二  
十分、一、時、十分、一、是と、一、尺、と、一、分、と、一、寸、と、一、厘、と、曆  
の、年、始、に、刻、十、六、分、餘、の、知、り、て、毎、の、九、つ、以、以、鼓、由、曆、と、鐘、と  
も、いつ、も、半、時、の、を、選、り、候、半、子、の、日、刻、十、六、分、餘、の、交、り  
あ、て、教、の、九、つ、と、鼓、是、昨、日、と、今、日、の、界、九、つ、と、あ、て  
の、後、ハ、今、曉、九、つ、半、八、つ、七、つ、と、明、六、つ、今、朝、と、云、是、よ  
係、て、曆、ふ、今、教、子、の、二、刻、と、ま、る、ま、る、日、の、教、由、  
かり、鐘、の、方、あ、く、一、百、半、時、守、り、て、九、つ、お、ね、由、く

鐘の方お、今秋子と云ふは、いつも今曉子、燈の  
の八割と用ふ入とあつた鐘、七の九分、七の時  
と云ふは、日陰未の八割とあつた鐘、七の時  
節や中ふ入刻ふかけは、但月陰をうり、明ふ時  
今秋のちよひ月のしち月と十ふは、その意著  
知鼓曆合刻一板世なる曆と鐘と刻と合ふもの  
昨日時計、潮汐の盈虚と周徳よむる事  
左の意と案、極小漲平にきて、止中、計、海、うら、ね、振、ふ、建

但竹と細くはつて、  
長さが、  
南北中しく、居計  
の形の、さも、知そ  
めど、十一月の  
中と十二月の長  
と同く、八月  
の半と、六月の節  
と同く。さ、同、暮、ら、つ、の



原暮氣の改正

改正

蒸氣と合を。そ長と伸とに依て。を筋の時と云ふ。

但朝日東方不出。つる朝中。曾小日西方に入。つる朝中。其の時

より。二時。三時。の。積。ま。り。も。層。較。一。分。と。ま。あ。け。て。百。六。十。分。を

日出。又。入。て。百。六。十。分。を。て。ま。す。二。時。の。日。射。は。ん。中。を。て。ま。す。終。り。

日時。計。は。月。毎。に。後。て。今。割。り。て。日。の。長。を。日。入。と。す。毎。日。を。法。する。板。紙

を。明。六。百。多。の。板。紙。に。時。平均。して。云。ひ。の。あり。年。に。片。さ。す。四。小。水。と。盛。ま。す。一。年。の。時。計。い。ふ。も。亦。其。の

多。と。以。て。不。平。と。試。ま。る。へ。△湖。波。を。最。初。に。法。に。し。り。た。る。

月。の。少。水。海。と。反。接。入。水。海。と。反。接。と。云。ひ。日。月。の。時。計。は。ち。

二。日。の。時。計。入。る。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

小。曾。六。日。時。計。十。六。日。時。計。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

明。と。曾。と。遠。く。も。海。月。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。

二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。二。日。の。時。計。は。



としめしむるに 朔日と十六日二日と十七日同日とあり。  
 十六日と十七日とあり。十八日あり。十九日あり。二十日あり。二十一日あり。二十二日あり。二十三日あり。二十四日あり。二十五日あり。二十六日あり。二十七日あり。二十八日あり。二十九日あり。三十日あり。

大小も推平均云々の小の月廿九日と朔日俄は八分  
 後を謂ふ。曆数も推平均は毎月の朔は一定なり。  
 おくも数も日く異なり。本中より日限も異なり。  
 の刻は清らし。またしつじつと依て日ちあること  
 大教と立て用。各々も又まま地味の勢も依る。  
 潮汐も今なる海もままなり。是はま地も別て異  
 程と異なるなり。

土地田畑が附る農家の用の文字

八池石地 礫市場 論所 埴圃 畑島 系坊  
林馬踏 緒新 蟹 土居 封疆 土堤 土場 泥地 土田 岐街  
高死系 土居 封疆 土堤 土場 泥地 土田 岐街  
衛巷 捷徑 町末 知行 頗知 頗内 頗分 隣郷 沼岳  
岡阜 津渡 場往 逆海 道街 道川 堀川 系河 卷川 附  
渴水 核理 石村 素山 子崖 田舎 沃野 肥田 用取 立場  
漢池 涌溜 田畝 畝畦 畦畔 草場 草場 錫阻 泰田  
塊礫 塚塚 塚塚 田中の 塘改 堤十字 街辻 字壺 字壺 旬

佃瑾 奉貢 地坳 畝南 代唱 子生 毛君 類耕 地  
畠地 村邑 沃地 沃食 澤剛 畦畝 畦畔 高澤  
埴野 野望 畦邊 野迫 郊系 系畔 圃圃 圃圃 煙石  
河隈 水窪 陸公 解の 畔 畔 畔 畔 畔 畔 畔 畔  
泥畑 畑畔 荒畦 山峽 濟瀆 山際 谷間 九折  
漢聲 谷火 田菽 折田 牧秣 場圃 場圃 場圃 場圃  
松系 系系 險阻 麓澗 澗比 結松 松澗 澗澗 澗澗  
那湖 水樹 立溪 小沙 菴去 直壘 坡瀆 澗水

洪波 多料 秋石 榛蔭 古墳 古田 隠田 江支川  
田地 田畑 出舟 網代木 潦水 雲縣 荒地 埴崎  
新雙 萬田 禽 新田 田之部 田之部 雙土 穴  
小石 細石 湍深 沃 波 赤隈 坂 隆 采地 采苑  
郷里 界隈 境 疆 化毛 雲母 岸 崖 給地 給不  
齋通 出谷 名所 嶺 峯 岬 津 湖 水田 水田  
汀 湊 清 洳 水 元 津 田 道 途 莊 園 社 願  
津 願 寺 願 弘 願 島 洲 濕 地 陸 津 新 通 蛇 蔭

城下 新田 流 作 湯 天 願 城 址 芝 地 宿 場 榎 林  
杜 邊 國 所 瀨 下 野 走 法 洲 崎 反 別 町 反  
二百歩 畝 三十歩 歩 一坪 種 却 晴 入 仕 付 桂 切 卷 込 化 徒  
損 毛 上 中 下 田 下 見 毛 採 檢 見 合 附 坪 刈 定 免  
破 高 免 免 屋 附 免 出 皆 願 納 過 上 納 免 免 免  
の 字 あり

醫師へ遺を伝書小入用の文字  
凡疾と信ハ聖人の教あり。医ニ世あり。汝ハ其業以伝

世どと有り。一代の医。其死刑不熟まること賞本かく。氏  
もお侍の内也。を以用ひく。おに侍る。良方と有り。へこ  
おへとも。親族之時。子先を茶と着て。後親不執る  
他人や。正は。小者。小任。をも。聖人の戒。を。素昧せざる  
所。以。く。室。を。さ。り。乳。睡。位。の。序。小。髪。毛。一。筋。や。り。の。老  
より。千里の。路。を。と。と。又。脈。を。生。ふ。て。薬。を。ま。は。し  
殺。す。も。あ。ま。ば。一。身。の。生。死。と。人。小。要。と。る。種。う。う。さ。る  
ふと。又。柳。の。疾。も。庸。医。の。薬。以。用。べ。う。じ。ば。其。方。を

送も。不。自由。なる。処。多。し。毎。小。功。者。の。医。と。訊。ま。く。  
病。利。小。充。へ。さ。す。病。人。の。容。體。と。り。ま。は。し。は。よ。ら。ど  
あ。く。云。送。種。忽。之。遠。方。の。医。見。白。も。を。た。り。の。友。  
日。こ。の。松。林。食。物。の。多。少。二。役。の。通。号。も。て。日。帳  
か。ど。い。魂。を。茶。を。小。持。せ。ま。べ。し。取。松。林。書。に。依。字。小  
書。も。独。り。し。も。医。家。へ。食。物。の。禁。好。以。尋。ま。し。小。難  
と。酒。同。刻。あ。く。を。遠。く。る。と。せ。り。病。者。乃。又。字  
荒。増。た。小。識





日 養生 害太 能魂性 繁能 丹田 歎息 臂掌 膝肉  
 膝痛 膝痺 膝痺 膝痺 膝痺 膝痺 膝痺 膝痺 膝痺 膝痺  
 晚肝 癖 将 胆 射 以 症 起 身 志 腿 收 屈 怠 倦 大 髓  
 大 腸 大 便 第 一 元 烟 烟 烟 烟 烟 烟 烟 烟 烟 烟 烟 烟  
 介 抱 源 法 療 表 歷 節 風 編 牙 背 胸 而 花 不 理 凌  
 理 内 痺 内 周 利 平 中 風 走 湯 走 湯 走 湯 走 湯 走 湯 走 湯  
 外 課 既 風 既 痛 旋 毛 便 凡 凡 凡 凡 凡 凡 凡 凡 凡 凡  
 肝 冥 骨 聲 通 至 氣 痛 痛 風 鬼 症 蕪 蕪  
 二 三 九

月 冰 德 熱 汗 行 的 寢 冷 盜 汗 熱 氣 熱 病  
 痲 根 種 相 遠 澤 風 内 之 也 貌 容 態 繁 繁 繁 繁 繁 繁  
 天 庭 淚 生 凡 生 心 將 指 聚 毛 男 根 注 應 能 病  
 能 產 能 滋 能 候 能 志 内 傷 内 倦 内 泣 内 熱  
 内 痔 内 攻 内 換 内 勞 赤 痔 淫 最 病 白 刺 瘰 癧  
 微 風 泥 食 瘰 癧 的 老 衰 老 衰 勞 疫 勞 疫 勞 疫  
 勞 志 乱 氣 乱 心 瘰 癧 癰 疽 瘰 癧 下 疳 疔  
 勢 截 男 根 樞 板 齒 齲 牙 蒸 齒 胸 膈 心 頭

心動 心忡 胸波 胃腕痛 噎 煩鬱 煩嘔 思心 吐酸

吐酸 胃脘 肝扭 枝指 肝骨 虛涵 浮腫 枕氣

枕持 義遠 頂胎 髮賊 外癢 表皮 眩暈 膝

膏沃 暎汁 熱 石飽 沫瘰 傳沫 疥 疔

臂氣 臂熱 背症 痼痲 痰涎 現瘰 瘰 撲傷

撲氣 罔喉 吮盤 後瘡 總外 首雲 腦 吻

脣 渴斜 必名指 緊急 切課 胃脘 痲 懷妊

懷胎 痢病 深刺 浮腫 疔 疔 疔 疔 疔 疔

痺 折傷 黃瘡 疔毒 疔毒 疔毒 疔毒 疔毒 疔毒

腦行 苦痛 五情 系外 有神 覬 通視 端

癩瘡 湯火傷 瘦 水瘰 養生 瘰病 楊梅瘰 癩

疾痛 赤額 眉毛 睫 瞽 瞬 肉眦 外特 瞬 睛

睛 麻木 慢驚 風 癩 瘋 肉刺 毛孔 元氣 血氣

血積 血塊 血淋 血志 血分 經絡 經用 經水

月經 經行 懸癰 下疳 下焦 下血 下疳 瘰 瘰

血氣 肩墜 眩暈 健忘 陰毛 刺 瘰 瘰 瘰 瘰

瘰 瘰 瘰 瘰 瘰 瘰 瘰 瘰 瘰 瘰





力 乳分 乳久 年血 氣骨 氣方 重積 氣逆  
 麻息 刺痛 紫口刺 胸痛 失志 闷眩 虚勞 虚損  
 分 虛劑 虚眼 志痛 志忘 志所 痛疾 逆牙  
 魚口 痲 收毒 驚風 狂氣 疵 金創 九死 一生 括  
 劫 括 波 名瘰 面結 面如 眼睛 睛 首  
 替 眩暈 眩暈 身 耳 聾 聾 耳 清 淡 寸  
 脈 耳門 耳垂 珠 妊 起 脹 舌 彈 鼓 珠 宿  
 上焦 上界 白睛 白脈 白痔 白壳 瘰 心 係

心 痛 心痛 美 心痛 心包 結 結 血 的 痛 實 志 章 門 香  
 腎 虛 門 腎 統 腎 虛 肉 敏 脹 尻 腎  
 肛門 結 劑 白 劑 撲 聚 塊 雜 物 積 氣 凍 瘰  
 筋 龍 浮 時 脈 中 時 疫 傷 風 傷 寒 傷 寒 症 症 又  
 自 汗 暑 邪 氣 麻 木 痿 痺 濕 痿 濕 氣 赤 脈  
 食 傷 食 滿 呃 吐 多 是 厥 冷 舌 硬 百 舍  
 額 髮 暗 眸子 昏 食 括 肘 皮 膚 皮 肉 肚  
 胭 膝 膝 蓋 肥 波 肥 立 秘 結 皮 癬 癩







若事法及... 者... 其... 方...  
孫出... 披... 家内... 人... 婦... 妹... 兄... 弟...

人... 時... 人... 以...

右... 通... 地... 吏... 人... 孫... 立... 以... 爲... 爲... 何... 孫... 以... 爲... 孫... 出... 入... 等...

出... 來... 以... 先... 諸... 吏... 地... 吏... 方... 下... 門... 吏... 吏... 及... 增... 明... 者... 孫... 以... 爲... 孫... 出... 入... 等...

苦... 苦... 掛... 官... 吏... 以... 爲... 法... 日... 地... 傳... 花... 又... 如... 傳...

信宿河町推本

年号月日

地傳

誰年

誰年

誰年

不... 文... 版... の... 内... 浪... 人... 孫... 立... 以... 爲... 爲... 何... 孫... 以... 爲... 孫... 出... 入... 等...

何... 孫... 以... 爲... 孫... 出... 入... 等... 孫... 出... 入... 等... 孫... 出... 入... 等...

少... 也... 年... 号... 月... 日... 孫... 出... 入... 等... 孫... 出... 入... 等... 孫... 出... 入... 等...

孫... 出... 入... 等...

家... 質... 禮... 文... の... 賣... 法... 流... 文... と... 孫... 立... 以... 爲... 爲... 何... 孫... 以... 爲... 孫... 出... 入... 等...

孫... 出... 入... 等... 孫... 出... 入... 等... 孫... 出... 入... 等... 孫... 出... 入... 等...



年号月日

在事長

誰 下

能全

誰 下

日

誰 下

名

誰 下

誰 反

唯し大なる村の組頭のとて及中や多し如あり小村のりとも其の  
加平之及中なれば元文の頃の元始の頃よりなりと云ふ事  
と書す拾年賃入り家屋敷の事と書す元文の頃より拾年  
の旨は賃入の利をへ入能事なる事と書す元文の頃より

二年八

知事券状と賃入元文と書す事

家守更状の事

一 以誰とて者榎成者付揚之其法入の事書す反四五拾  
南君何町何例表間には 東君 何間更何何家幅何君  
有し家屋敷家子為付中不事と云ふ代店賃の法と  
者及町及諸入用家子給金家化書法の外入用事と  
右誰方より文致は掃き月根法何程元毎月何日  
乃相法守の事書す何月と家書為法は若くは何日



正月、乙卯、右ノ家屋鋪。爲ノ一、山、勿、福  
期月、不、来、此、地、代、店、賃、是、月、中、我、お、満、山、ノ、家、守  
以、九、段、ノ、取、出、此、時、故、夫、家、屋、爲、其、後、中、山、一  
類、焼、亦、後、有、此、地、代、店、賃、右、指、ノ、通、中、お、遠  
爲、指、出、中、山

一、宗、高、代、ノ、何、家、来、何、村、何、寺、檀、那、修、其、山、在、此、表  
修、其、山、ノ、標、也、者、以、度、以、地、代、何、方、上、其、修、其、  
意、亦、以、披、下、仕、也  
右、ノ、通、家、書、信、其、是、以、上、其、意、也、何、以、上、其、表、出、入、其、  
出来、山、大、抄、名、其、信、意、其、増、時、其、度、也、少、後、其、若、芳  
也、然、一、同、表、以、爲、後、日、家、守、信、洗、文、如、件

年号月日

誰人 誰人 誰人

誰人

誰版

入部一札之事

此度も版に金何程も用立奉る割し利益は、奉  
何れ月迄に元利お返し通漸し約束も名を組合  
奉る何れ月迄に元利お返し通漸し約束も名を組合  
と云ふに、金子お返しに元利お返しと云ふ間も版に  
何れ月迄に元利お返し通漸し約束も名を組合  
と云ふに、金子お返しに元利お返しと云ふ間も版に

守

誰版

金子お返しに元利お返しと云ふ間も版に  
後述一札抄

年月日

増  
誰版

宛名

養子表女様と化材へ遣。又化材へ取も、双方没入り送  
誰版の一札抄に、人引入替り、又版荒増を、通  
送一札

拙者村内百姓誰娘何村誰友婿も山村方誰友事也  
誰友妻縁組波熱法は度為引移し山傳し山村  
人別お除り名向後山村方山人別し山入公事り山  
おひ山花山以上

わんごう  
年号月日

何之誰梅沙屋  
何那何村

山名主中

何之誰梅沙屋  
何那何村

葉巻一札

山村方山百姓誰友法男誰友事誰友婿も山村誰友誰  
妻縁組波熱法は度為引移し山傳し山村  
山向後山村山人別し山入公事り山

わんごう  
年号月日

何之誰梅沙屋  
何那何村

山名主中

何之誰梅沙屋  
何那何村

山名主中

惟しむは満月の送落るに似たりと云ふは同書  
内日入形半老より一村の用之も似たりと云ふは  
一札の

離別情は妻あくも妾子あくも又既同書之隨も短く書

てよし。ふりまると云ふは似たりも短く書之志は及ぶ

事不書りのと云ふは似たりも同書之元来と云ふは似たり

定法もなり  
直方中離縁海で相違入  
送落るを云ふは似たり

離縁一札

元事不勢に付離縁しうしは似たりと云ふは似たり  
若様はしは似たり一札を云ふは似たり

何月日 惟生

これどよ

唯しむは満月の送落るに似たりと云ふは同書

為縁一札

南月幾日結多事似たりと云ふは似たり  
藤村誰及も及は満月の送落るに似たりと云ふは似たり

少派の宿山と不中用却ら及悉に別様指し以紙付候  
氣し毒出候事好山南人後長一云し中決云し今支  
波江梅忠入新喜山在村喜向つり候に頼如隣村誰友  
南村誰方取山不常山候一同新喜山候依山在紙不  
以藤法入用金何友誰方人為長一山をけ候者友  
禁酒為波山候然とて以来取方有忠と云し石友  
為一札如件

未馬月日

維下

維合 維下  
誰人 誰下  
何 誰下

何 誰友

内海一札事

為月幾日遠事多愛以長誰友隣村誰友一以及  
以論以村梓誰立入山内お子遊喜山連梓とてお子友  
悉に一と多紙は度山始末酒程とて中一と多種友五

存し次第中 乞少檢使了事知誰く成り方致有  
其後任事者も右存不為檢法代令の友徳文よりん  
此後此生は君名有し君友は何南の世に候事  
其後日一札如神

宛所連名

俺一札事

何相  
惟午  
惟午

先此隣村相撲見物と改以途申候人入遠らまき成り  
及打擲候一云申候事重々誤合以對候事  
忘恨等知事長以同道に誰候何者市長貸借  
候事於人前と恥辱候事付候事候事  
人遠は其意察忽し是相同次第等長意候以候事  
お尋下中候に次第等も候事候事候事  
種お立候事感候事何分少幼候事候事候事  
手紙に誰候事候事候事一札事候事候事



百ハ文ハ分目ハ四ハ文ハ百銀部ハ分ハ知ハ定法アリ  
△子算ハ八百銀部ハ文ハ五ハ四ハ算ハ割掛文ハ付  
目分の日ハ百銀部ハ文ハ分ハ知ハ算ハ銀部  
知ハ分ハ通用ハ遠ハ程ハ分ハ知ハ算ハ銀部

○銀ハ文の算物ハ錢ハ百銀部ハ文ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢  
相場ハ程ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部  
一ハハ文ハ分ハ九ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部

○二丈六尺の丈アリ 割て。キ銀部切と知定法ハ△子算ハ  
キ銀部の代ハ四ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部  
キ銀部の代ハ四ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部

○たふ有物ハ銀部の代ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部  
附アリ。天橋織キて女の帯ハ細ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部  
是ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部

キ銀部の代ハ分ハ知ハ算ハ銀部の錢ハ分ハ知ハ算ハ銀部



播入取法家百九播入取八分七厘八毫と知他一かみのしら  
一丈二寸 △又うまじばく下らふまを八八と定ては他一ゆき  
△又うまじばく下らふまを八八と定ては別も甲  
○まう及之播入取の法と持合の法は百九播入取何人  
まんと知ふま及の法百播入取何人何法何百九又  
と目安ふして持法と別他もい百又八法又銀て取  
まトそりこ是とま及取又六尺八寸百九及八分六厘  
と知るとま及の代を別と入六分七厘と知他一ゆき  
まう及の法は百九又八分七厘と知  
此丈六尺八寸一

○小賣白米百又ふま外別合給取の定米何程の播と  
知ふ法の法は百八又八分七厘と知他一ゆき  
と定一外別合給け七中八外合二を定と白  
かふ内別割の減と見く八少く割九中七外九合  
外白かり他一別すの減か  
○清蒸米お湯も農取不入用の材と取ま取まを定  
取米八少取お湯何程お湯と知ふ八少取八少  
まを定と中別米八少取八少取八少と

ハリン。け。之。様。を。貴。ハ。金。之。様。を。取。之。七。百。の。様。又。も。  
之。分。と。之。金。之。様。を。取。之。分。氷。六。様。八。又。も。ハ。リ。  
揚。永。ハ。六。成。之。様。は。九。リ。ン。ハ。と。分。也。

○ 湯。花。米。百。俵。之。様。は。取。之。取。之。取。何。程。の。お。場。と。知。之。様。  
之。石。と。之。代。之。様。は。取。之。割。ハ。九。中。七。外。氷。合。計。分。と。知。  
若。お。湯。水。を。分。計。分。は。湯。あ。ら。之。分。ハ。七。百。の。様。又。  
計。分。ハ。六。百。又。も。分。計。分。は。計。分。又。と。之。取。之。目。安。ハ。氷。  
と。知。之。一。百。俵。之。取。之。分。の。お。場。は。之。氷。は。計。分。之。貴。

九百八

七百の様又と目安にて二様石と割八斗と知外は取分  
○ 湯。花。お。場。之。様。は。取。分。と。之。米。を。俵。の。代。と。知。氷。之。様。  
目。貴。ハ。百。又。と。之。白。俵。ハ。割。氷。之。百。俵。又。是。ハ。六。成。  
之。様。取。分。と。知。計。分。七。斗。之。取。分。ハ。湯。花。お。場。ハ。之。六。成。  
之。取。分。と。知。計。分。七。斗。之。取。分。ハ。湯。花。お。場。ハ。之。六。成。  
之。取。分。と。知。計。分。七。斗。之。取。分。ハ。湯。花。お。場。ハ。之。六。成。  
○ 米。計。分。の。合。と。俵。を。取。分。下。小。買。之。分。ハ。米。取。分。の。程。は。お。場。  
と。知。計。分。の。合。ハ。湯。花。お。場。之。取。分。ハ。湯。花。お。場。之。取。分。  
○ 金。を。取。分。之。石。ハ。外。湯。花。之。取。分。ハ。米。計。分。の。代。之。百。俵。は。又。計。分。

き支の積お場いし程と知。き石の井へ二百部積日支  
と系つげの井小割。六百甲又と知。計是てお場と之

○米相場支。き石の井へ。石の井の代何程とえ。とれ。

少し小割は石の井へ。減りけ。き石の井小割。根部百石

部支を下部厚六毛と知。△同下お場支。四百石石の

代何程とえ。とれ。大なる割。四百石石とをき。き石

三井小割。水四百石積。六百九石支部。とる。紙

金四百石積。支部。水積。八支部。計。四部。入。六

とけ。根を九リン。部毛と知。〓

お場と立。知。あり。び。九。根。お場。九。引。  
の。信。方。い。後。筋。よ。出。せ。お。ま。に。世。

○百支。小。甲。又。の。利。何。支。を。分。か。け。る。と。知。二。十。石。と。き。て

日。又。少。て。割。と。支。小。を。分。と。知。△。目。子。算。小。を。き。い。日。又。の。積

積。り。て。き。分。か。け。る。い。日。又。と。何。程。と。え。る。い。を。分。か。け。り

を。費。七。百。支。の。お。場。か。ら。先。百。支。の。日。又。の。井。小。割。を。費

七。百。支。の。井。小。割。に。け。て。日。又。の。井。小。割。を。集。ま。り。し。き。も。と。知。

お。甲。又。の。本。筋。百。支。の。井。小。割。か。ら。き。も。と。知。て。百。支。と。を

四百八十元。利息は八百元。けしきとて、その法に  
八百元と別は、八百元と知。又右の法、八百元と別は、  
七百元と別は、二百元と知。是れ小粒して、二十日  
も一回、一歩、利は、女は、九、一、とて、八百元と知。  
女は、別は、一回。子算、女は、八百元と知。何程  
ても、女は、別は、八百元と知。

○金貸し、三月、借、利、九、銀、掛、何、元、分、と、知、お、  
甲、乙、と、三月、と、知、掛、六、元、法、九、元、別、掛、何、元、分、の、利、と、知、

百五十

○金貸し、何、元、分、の、利、は、金、を、何、元、の、利、何、程、と、知、掛、何、  
と、女、は、別、は、何、と、知、は、法、に、△、子、算、は、女、は、何、元、分、と、知、  
は、月、女、は、何、元、別、は、何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、

○金貸し、何、元、分、の、利、は、何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、  
掛、何、元、と、知、七、下、の、法、別、は、何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、

○金貸し、何、元、分、の、利、は、何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、  
の、利、は、何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、△、子、算、は、何、元、分、と、知、  
何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、何、元、分、と、知、

○月小格の取き分の利と年申の法。何割小苗と知るを  
色格の取割。年取割と知△月よき取ふ七ト介の利。年  
申の法(てきま)七ト介の取とけ。年取割と知るて取は法は

○系間之格の同と田舎の法。何間と知る格の取入の取  
法系又小割の格七間入の取と知る。何の取入の取

する時。取格の取入の取と知る。何の取入の取  
割の 他は入の下の割 △田舎間之格の同と年取の取入の取

二格の同への取入の取。六六の取の格の取入の取。是も何の取  
ある格と覚居る。是知と割入

○系間之格の取入の取と田舎間坪小取の取。六尺の取と自取の取  
里二二の取と知る。二格の取入の取。六尺の自取の取。二二の取

割。何格の取入の取。六尺の取と知る。一坪の取と割△田舎  
間坪と系間坪小取の取。二二の取と知る。二二の取と割の取

金銀重さの約合秤目品

村方にて取入も動る者。年取合を懐中にて法と

するも有り。又、是等の金箱も入人吏にて取入

け時令浪目方約金と知は夫は収利くよく存不記也。  
浪目かくつまるるもて。目方比令也

令を分目方八ト 百接あて目方二百六接あ

小判を要目方五下 百あて目方二百六接あ 大抵約金

赤米浪目方五七下 接あて目方二百廿五

秤ハ大小ふくもて秤目と知れ、受受まう後。依てまう

人の多招入妙計と記も。小判も以て警警等。大かれば秤

云。俵ハ衝鑊ハ權が如字之

上同上緒とてまう接あて 赤目中緒と接あて 赤目と

白目元緒とて入接目と白目元緒と行也 赤目と 白目と

赤目中緒と同上緒 赤目中緒 赤目と 白目と

右二の緒と助目とりの下おりのけ以下緒赤龍同りり二也

赤目中緒と同上緒と接あて 赤目中緒と接あて 赤目と

赤目中緒と同上緒と接あて 赤目中緒と接あて 赤目と

百目 杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

杖秤と目と緒とて百目とて貴目と横の目元緒とて貴目とて貴目と

江戸書物問屋

和泉屋金右衛門

横山町三丁目

文化十四年丁丑孟春原刻

安政四年丁巳仲冬再刻

農家殖産記二篇 終

終